

\*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



# 16,770,000円

## ボランティア貯金配分決定!!

今年3月、「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」の助成金を申請し、その結果を首を長くして待っていましたが、7月に入り、待ちに待った「配分決定のお知らせ」が入りました。

郵政公社では、今年10月からの民営化により「ボランティア貯金制度」が廃止され、「今年の配分を受けた団体のみが、今後5年間にわたり、申請・配分の資格を得ることができる」という、重要な申請でした。すなわち、これから5年間の道が大きく開かれたということを示し

ています。この配分金は、主に「バイオディーゼル燃料装置とバイオガスプラント」、そして専門家派遣費用に充てられます。このプロジェクトは5ヵ年計画ではありますが、初年度に「上記2つのプラント設置」という大物の設備投資が計画されており、今回の配分金はまさに値千金です。

実は、ボランティア貯金の配分決定は、6月中旬から下旬と聞いており、6月末、運営委員はそれぞれに「だめだったのかな」という悲痛な思いで過ごしていましたが、ところが朗報が入り、どれほど安堵し喜んだことか！ 実は、ボランティア貯金制度には、「5年以上継続した同一事業には配分しない」という方針があり、ここ数年は「救援・中部」も申請から遠ざかっていましたが、新プロジェクトの資金獲得のため勝負に挑み、見事勝利を収めることができたわけです。しかし、プロジェクトの全費用は4千万を超えます。

まだまだ資金は不足しています。引き続き、皆様の心温まるカンパをお待ちしております。

そして、私たちもこれを励みに全力投球します。

(市原)



〈種をつけ始めたナタネ畑〉

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：小牧 崇

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

## 今こそ原発政策の見直しを

----- チェルノブイリを日本で起こさないために -----

7月16日の中越沖地震は、これまで指摘されながら政府や電力会社が無視してきた、地震による原発事故の恐ろしさを垣間見せた。今後発生が確実視されている「東海地震」による、浜岡原発の重大事故の結果は、予想をはるかに越えたものになろう。今こそ、国の原発推進政策を根本的に見直し、新たなエネルギー政策に転換すべき時である。最近起きた燃料棒落下事故といい、今回の地震といい、日本はチェルノブイリへの階段を、確実に一步一步登っている。地震は止められないが、原発は止められる。「まだ間に合う」と心に決めて、新たな一步を踏み出そう。

## ● 予想を越えた震度と震源

地震の揺れの最大加速度680ガルは、柏崎刈羽原発の設計基準273ガルをはるかに越えた。このことだけでも、地震国日本での原発建設が、いかに困難なものであるかを示す。設計時には19~39Km北の海底にあるとされた活断層は、今回、原発の直下まで延びていることが明らかになった。今年3月に起きた能登半島地震でも、志賀原発建設での予想規模(マグニチュード6.6)を超えた、M6.9の規模の地震が起きた。これまで、日本が地震による原発重大事故に見舞われなかったのは、単なる偶然でしかない。

## ● 環境への放射能放出と60箇所への破損

地震によって、海と大気中に放射能が漏れたのも、初めてである。事故から3日たっても、「なぜ漏れたのか明らかでない」という。膨大な量の放射能を抱える使用済み燃料プールは、地震動で大きく揺さぶられ、汚染した水があふれ出て、6階の床は水浸しになった。

2万本を超える低レベル放射能廃棄物のドラム缶も、室内で散乱し、蓋が外れて中身が出ていた。消火用配管も、壊れて水圧が上がらず、初期消火が出来なかった。

こうした様々な破損箇所は、60箇所を越えるという。今後調査が進めば、更に増えると予想される。これらの多くは、事前に予想できることであった…にも関わらず、電力会社と政府は、事が起こってから「予想外」「想定外」を繰り返すばかりである。

## ● 緊急自動停止と変圧器火災の恐怖

地震の際、1・5・6号機は定期点検中で止まっていたが、2・3・4・7号機は運転中だった。これら全ての原子炉は、地震の大きな揺れで制御棒が入り、緊急停止した。しかし、「それで良かった」と思うのは早計である。

原発は、核分裂が止まってもなお、炉心で膨大な熱を発生し続けるので、停止後も再循環ポンプを回し、炉心を冷却しなければならない。再循環ポンプは、原発の電気の30%も消費する大電力が必要である。緊急停止後は、当然外部から電力を供給しなければならない。ここで、今回の変圧器火災が問題になる。2時間も続いた火災の間、外部からの電力は供給されなかったはずである。最後の頼みは、所内の緊急用ディーゼル発電機だが、今回これが働いたのだろうか？

もし、発電機も地震で動かなければ、当然、炉心溶融…まさに、我々はチェルノブイリと隣り合わせだったのだ。

「外部電源喪失」は、原発の安全審査でも、最も厳しい基準のはずである。詳細な調査と情報公開が望まれる。

## ● 化石燃料としての原発に見切りを

原発の燃料ウランは、OECD(経済協力開発機構)によれば、あと64年しか持たない。それを解決するといわれた高速増殖炉「もんじゅ」は、「燃料倍増時間が90年」という非現実的なもので、実現不可能である。

「もんじゅ」も、それを動かすための「六ヶ所村再処理工場」も、税金の無駄でしかない。チェルノブイリの二の舞を踏まないうちに、原子力から撤退しよう。(河田)

新理事長からのご挨拶

青空の下 菜の花畑で乾杯！を夢見て

伊那市：小牧 崇

☆「行動の指針となるべき尺度は、ぼくたちが未来を先取りすることによって、手に入れなくてはならない」

(オリーブの森で語り合う：ミヒャエル・エンデ)

☆「それでもやはり言葉を信じ、言葉とともに人の心に向かって歩みましょう」

(スベトラーナ・アレクシエーヴィチ)

私が、チェルノブイリ救援の活動にささやかに関わることで知った、二片のフレーズ。汚染地帯ナロジチとの最初の出会いは、16年前の夏。

『原発事故資料館のある建物の横は、小さな公園になっていた。木立の向こうに、馬が数頭草を食んでいる。その前を、大きな草刈り鎌を担いだ男が横切る。反対側に目をやると、ベンチに老人が数人腰掛けて、何かおしゃべりをしている。周囲は、あふれんばかりの緑。私の五感は、この平和な風景を「しみじみいいなあ…」と感じている。しかし、私たちが持参した2台の放射線測定器は、「ピピピピピ」とアラーム音を発して、私の感覚に異議を唱えている。公園の草地は、平常値の10倍以上の放射線量を記録したのであった…』(当時の報告書より)

事故から5年を経て、ようやく、汚染の実態が日本でも知られるようになった時期でした。持参した救援物資を病院に届け、医者や患者さんの家族から被害の実態を伺いながら、何度胸ふさぐ思いに駆られたことか。しかし、汚染された大地に立って、「いいなあ」と感じる自分があることへの戸惑いも、強く持ちました。「現在」を見るだけでは判らない。どうすべきかの判断基準を、「未来を先取りすることによって、手に入れなくてはならない」とするM・エンデの言葉を、深く心に刻んだのでした。環境問題全般にも言えるのですが、とりわけ被害がきわめて長期間にわたる、放射能汚染問題を考える時、「未来を先取りする」ことは大切だと思います。

その後、事故の被災者に関する情報が、次々と届くようになりました。その中でもとりわけ強い感銘を受けた本が、「チェルノブイリの祈り」です。4年前の秋、全国各地で活動する救援団体が協力し合い、著者であるアレクシエーヴィチさんをお招きして、連続講演会が開催されました。私の住む信州伊那でも、印象深いお話をさせていただきました。二番目に紹介したフレーズが、講演終了後に設けた懇親会の場で、著書へのサインに添えて書き加えられた言葉です。彼女は、その著作活動ゆえに、ベラルーシの現政権から弾圧を受け、祖国に戻れずにいます。「それでもやはり」の裏側には、そんな現実に対する様々な思いが詰まっているのでしょうか。それでも私たちに、「言葉とともに、人の心に向かって歩もう」と呼びかけてくれる。とても励まされました。

私たちが関わっているナロジチは、「全員避難すべき」高濃度汚染地帯。そこに、今もなお1万人を超す人々が暮らしているのですが、訪れるたびに、美しい自然と素朴な人々に惹かれます。「未来を先取りする」までもなく、ナロジチへの支援は、「賽の河原」ともいえるべき困難を抱えています。

しかし、昨年より「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」が立ち上がり、明るい未来を展望できる可能性も生まれています。やはり、支援は「希望」に向かってなされるもの。今回の支援は、伊那グループが長年取り組んできた『自然エネルギー利用技術』が中心でもあります。力を入れざるを得ません。長い前置きになってしまいました。去る6月23日、「あいちNPO交流プラザ」で開かれた『2007年度総会』において、市原さんの後を引き継ぐことになった小牧です。名古屋から離れていますので、皆さんに迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、よろしく願いいたします。



<2007年度の理事集合>

## <9月代表団・専門家派遣>

「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」は、多くの方々からのご寄附と、郵政公社「ボランティア貯金寄附金配分決定」を受け、着々とスケジュールを進めています。

9月には、このプロジェクトの「バイオディーゼルプラント」担当の前澤功さん、「バイオガスプラント」担当で理事でもある原富男さん（両氏とも伊那在住）、放射能・栽培関連担当、科学者で理事の河田昌東さん、そして運営委員の榎本恭子さんを、現地に派遣します。（理事の戸村さん、神野(美)さんも自費参加）

菜の花プロ関連の主な仕事としては

1. 春蒔きナタネの栽培状況とその結果に基づき、次期の栽培の検討。
2. 土壌、ナタネの分析と放射能測定。それらに係わる問題点・コストについて。
3. バイオマスの保管状況確認。作業者の被曝防護対策。
4. バイオディーゼルプラントとバイオガスプラントの設置段取り。
5. ナロジチ地区住民との対話のための集会を設定し、プロジェクトの説明を行い、理解と同意をしていただく。

私たちは、5項を特に重要な事として捉え、ナロジチの人々がこのプロジェクトで「希望」を持ち、「自分たちのことは自分たちで拓いていく」という意識付けの契機になればと考えています。

ホステージ基金・農業生態学大学関係者・ナロジチ行政担当者等と綿密な話し合いを持ち、地元の方々にご理解いただき、このプロジェクトを確実なものにしていくための派遣です。また、そのほか、このプロジェクト以外の話し合いも行ってきます。障害者団体の「民間健康保険制度加入」に関する評価、今後の医療機器メンテナンス、2007年度予算説明・計画等についてです。相変わらず「課題」満載の訪問ですが、帰国後により報告が聞ける事を、期待したいと思います。（山盛）

### 「菜の花便り」その2

今日（7月13日）の竹内さんの報告によると、「ナタネはもう花を散らし、もうじき最初の収穫を迎えようとしている」そうです。巻頭及び右の写真では、黄色のお花畑の面影はなく、ちらほら茶色くなりかけた薄緑の中に、私達にはおなじみとなったティードゥフ助教授が、施肥をしたナタネとそうでないものとを比べています。

そして、いつも「戒めの一言で存在を知らしめる」キリ

チャンスキー氏の笑顔が、こちらの顔までもほころばせます。花びらは落ちたと言えど、大の男が5人、ナタネの中に立つ姿はおかしなものですが、表情は皆真剣です。

しかし、その真剣さの中には、何かあるのでしょうか？ 宮腰さんの記録(ビデオ)の中で、彼らの1人は、「非居住地域はもしかしたら、いつか国が豊かになったとき、対応するかもしれません。今はそのお金はありません。」と言っています。ウクライナ特にキエフでは、行政の道を外れた権力争いが横行し、資本主義の波に翻弄され日本と同様、急激な格差社会となっています。キリ氏的に解読するならば、「まず今は、私が豊かになりたい。そしてその後も分け与えるつもりはありません。」と考える人が多いのが現実でしょう。そんな中、いつも被害を被るのは、堅実に生活しようとしている人たちです。なかでもチェルノブイリの被災者は、荒波から引き上げられることなく、沈みゆくまま放置されています。

そしてまた、キリ氏の言葉を借りるならば、「波に沈む人を救おうとするのは、ウクライナと日本の荒波を泳ぎ続ける人々である。」というところでしょうか。しかし、幸運にもこのプロジェクトは理解され、助成金の交付も決まり、多くの方々から寄付が寄せられ始めました。

この希望の糸を断たないよう、みなさまの継続した支援をお願いいたします。

（榎本）







# 咲かせよう！菜の花 ～大地と人々に～

皆様お待たせいたしました、チャリティコンサートのご案内です。イタリア・日本で活躍の音楽家・後藤佳乃さん（現在名古屋在住）と「救援・中部」の幸運な出逢いによる、素敵なチャリティコンサートです。お越しをお待ちしております。

## ■日時

2007年11月10日(土)

午後1時開場 午後1時30分開演

## ■会場

名古屋聖マタイ教会

地下鉄桜通線「御器所4番出口」南へ徒歩5分  
(ロイヤルホスト手前右入る)

## ■入場料

大人2,000円 子ども(18歳以下)1,000円

## アルシュ・スタツア報告

6月30日、名古屋からアルシュ・スタツアのメンバー27名を伊那に迎えた。本来は原さんが案内人なのだが、彼が入院することになり、急遽代理を務めたのだ。

当日の天候と、狭い道を案内するため大型バスでうまく回れるかどうか心配だったが、当日は晴れ。伊那インター前に登場したのはぎゅうぎゅう詰めマイクロバス



だったので、不安解消である。中央道から天竜川を挟んで、対岸の段丘上にある我が家で、裏の農業用水に設置した2機の小水力発電装置を見てもらい、ちょうどラズベリーの収穫期でもあり、少しお土産に摘んでいただく。ふたたび中央道側に戻り、「ロジ吹上」にて昼食を摂った後、小野寺さん(土塊牧場)のバイオガス装置の見学。ガスコンロがのったテーブルが用意された牛舎の前で、11年間このバイオガスと付き合ってきた、よう子さんが迎えてくれた。実際にガスに点火するところを見た後、苦労話も交え丁寧な説明を受けた。最後の見学場所は、隣の箕輪町にある「伊那谷菜の花楽舎」のバイオディーゼル燃料プラントである。関さんと前沢さんがパネルを用意して待ちかまえていて、ここでも丁寧な説明があった。参加者は若い人が多く、しかも熱心に聞いてくれ、質問も多く出て、説明する側も熱が入っていた。ほぼ原さんの計画に沿って進行し、4時過ぎ予定通り帰途についた。天候と熱心な参加者に恵まれ、案内人としても大満足の日でした。(小牧)

## ■第一部

『ナロジチ再生 チャリティコンサート』

歌:後藤佳乃(ソプラノ)/ピアノ:伊藤美江

- 一、海の底まで測りうる愛 -ウクライナ民謡-
- 二、鸞(ウソ) -ウクライナ民謡-
- 三、愛の喜び -作曲:マルティーニ-
- 四、オペラ「妖精ヴィッリー」から「私がお前達のように小さい花だったら」

-作曲:ブッチーニ-

- 五、オラトリオ「メサイヤ」から

Rejoice greatly, O daughter of Zion

-作曲:ヘンデル-

- 六、オラトリオ「メサイヤ」から

He shall feed His flock like

-作曲:ヘンデル-

## ■第二部

『ナロジチ再生・菜の花プロジェクトの意義』

「救援・中部」の河田昌東さんが、プロジェクトの意義を語ります。

# 特集!!

## ポレーシェ 100号から見る、チェル救活動の軌跡――

### ポレーシェとは？

まず、おなじみの「ポレーシェ」ですが、「そもそもどういう意味？」という方もいらっしゃるでしょう。ウクライナとベラルーシの国境、プリピャチ川沿いにある湖沼地帯を指す言葉なのです。

### 「ポレーシェ」誕生秘話

チェル救は結成時、中部地方（長野・静岡・岐阜・愛知・三重）の17団体の連絡会であり、距離も遠く、それぞれの地方で忙しく活動する人たちの集まりだったため、一堂に会することさえ難しかったのです。運営委員会に欠席した人に、話し合いの内容や次回日時の調整の電話連絡をするだけで深夜になってしまう有様に、悲鳴を上げ、これは何かきちんとした連絡方法を取らなければならないと思い、「議事録配布」のような役割で始まりました。

### “チェルノブイリに思いをよせて”

当時、いち早く現地の状況を伝えていっちゃった、今は亡き松岡信夫さんの『ドキュメント チェルノブイリ』にあった“ポレーシェ”という言葉が、美しい現地の風景が想像されるような印象で、通信の名前に決めました。川が流れ、人々が水辺で遊び、泳ぎ、魚を釣り、木々が生き茂り、人々が保養に来る憩いの場所でした。そんな風光明媚な川や森が放射能に汚染されてしまった！なんとひどい、取り返しのつかない悲しいことか！

風景だけではなく、人々がどのような状況に置かれているのかと心が痛み、“チェルノブイリに思いをよせて”という言葉を追加しました。遠い日本から、被災者の人々の気持ちにつながればと思ったのです。

### それぞれの活動

今のように瞬時に世界を駆け巡るパソコンのメーリングリストは無かった！ やがて便利なファクスの時代が訪れると、今度はファクス用紙の洪水!? 現地からの情報を共有し、救援の内容を話し合い、人々にこれを広めて寄付金を募り、救援物資を送る段取り、実際の作業など、みな必死の思いで動き回っていました。そんな中でいろいろな事情から、自分の思いはあっても思い通りに動けず、担当メンバーの交代もありました。「ポレーシェ」は、そんな17年間の活動やそれぞれの人生の軌跡を確実に記録にとどめる役割を果たしてきました。

### 各地での編集作業

6号までは、代表（兼小使い）として、知多方面の「T」が一人作業で作成していましたが、あまりの忙しさに交代し、7号から引き継いだ春日井方面の「O」さんも、やはり一人での編集作業でした。24号まで頑張り続けましたが、25号からは岐阜方面の「K」さんが中心となり、現在おなじみのタイトル画が入り、集団編集体制を組んでメンバーのお寺に集まり各人ワープロを並べ、コピー機も使わせてもらいながら、夜遅くまで編集作業は続きました。

メンバーはみな家庭を抱え、子育てや親の介護もあり、編集作業は愛知の甚目寺方面「J」家にバトンタッチすることになりました。35号からは、もうワープロからノートパソコンに代わっての作業となりました。そして53号からは、名古屋の楽園アパートの事務所で、現在のメンバーでの編集体制が続いています。ここでもこだわりと粘りの「J」編集長のもと、日付のまたがる深夜まで仕事は続きます。奇数月の第3土曜日に最終編集を行い、パソコンを操るのがうまい編集人「美」と「佳」が技を発揮して、完成に漕ぎ着けます。印刷はおなじみの「エープリント」さんです。

そして今回ついに、「祝 100号」記念号を迎えました!!

### 新人編集員募集!

現在の編集体制は決して不変ではなく、新しい感性や技術も待たれています。ぜひ「ポレーシェ」編集ボランティアの出現を期待します。

## 「ポレーシェ」のバックナンバー記事のトピックス

- 第 1 号(1990.06.04)：4月16日、「チェルノブイリ救援・中部」発足。原発事故被災者の救援活動についての話し合い・事務局会議録。「広河隆一さん スライドと講演会」企画。
- 第 2 号(1990.07.16)：現地の状況等を尋ねた手紙が、旧ソ連の新聞・雑誌に掲載される。ウクライナ共和国(当時)ジトーミル州地方紙『ジトーミルスキー・ヴィースニク』編集長他からの返事、被災者の状況掲載。8月に代表団派遣を決定。
- 第 3 号(1990.08.31)：8/21 代表団(渡辺・坂東)派遣。救援物資(放射能測定器・使い捨て注射器・医薬品・粉ミルク等)500キロ準備。寄付金の会計報告(3,331,000円)。
- 第 4 号(1990.09.30)：救援物資が無事現地へ。ソ連からの手紙。救援の今後の課題。各地で現地訪問報告会。
- 第 8 号(1991.07.01)：ネチポレンコ編集長・ライサ医師来日、講演「5年目のチェルノブイリ」。
- 第 10 号(1991.02.28)：「ミルク・キャンペーン」で3.9t、「クリスマスカード・キャンペーン」で4,500通贈る。
- 第 11 号(1992.05.24)：国連へ出向き、「放射能難民」認定申請を「移住基金」と共同で提出。
- 第 12 号(1992.07.31)：ウクライナの医師(3人)が、日本で研修。
- 第 14 号(1992.11.30)：ジフテリア・はしかワクチン・キャンペーン40,000人分現地到着。
- 第 19 号(1992.10.09)：講演会「石棺を閉じた男たち」、消防士アントニョク氏ら来日講演。ウクライナの母たちの手紙集『たった一回の原発事故で』自費出版。寄付金が1億円を突破。
- 第 24 号(1994.11.16)：「いのちのゆりかごキャンペーン」で、新生児用保育器7台(675万円)を小児病院へ贈る。
- 第 25 号(1995.01.31)：阪神淡路大震災の被災者緊急救援。ウクライナへフレンドシップキルトを贈る。
- 第 33 号(1996.05.31)：特集「10年目のチェルノブイリ」第1回スタディ・ツアーで現地訪問。ジャーナリストのコバレフスカヤさんが連続講演。
- 第 37 号(1997.01.31)：ナロジチ病院の給湯・給水工事に原さん参加。
- 第 41 号(1997.09.30)：事故処理作業支援キャンペーンで、消防士たちを支援。
- 第 44 号(1998.03.31)：ナロジチ病院へ救急車を。手紙集『チェルノブイリからの風』自費出版。
- 第 45 号(1998.05.01)：消防士講演会「チェルノブイリは終わらない」。インド・パキスタン核実験に抗議声明文。
- 第 49 号(1999.01.31)：第1期ウクライナ講座開催。『チェルノブイリの祈り』出版(岩波書店)。
- 第 51 号(1999.05.31)：「チェルノブイリ奨学基金」設立。
- 第 53 号(1999.10.04)：東海村 JCO 臨界事故に抗議声明。第2回「スタディ・ツアー」実施。
- 第 56 号(2000.03.31)：チェル救を NPO(特定非営利活動)法人化。
- 第 63 号(2001.05.31)：事故15周年記念式典に参加。
- 第 66 号(2001.11.30)：ブルシロフ病院新病棟支援。車椅子キャンペーン。
- 第 71 号(2002.09.30)：名古屋 NGO センターの Nタマ「ミルク・カードキャンペーン」に大活躍。
- 第 82 号(2004.07.31)：草の根無償「移住者村診療所支援プロジェクト」交付金決定。
- 第 91 号(2006.01.31)：ポロトニツァ村上水道工事支援。
- 第 93 号(2006.05.31)：「チェルノブイリ事故20周年スタディ・ツアー」実施。現地で「1グリブナキャンペーン」支援バザー。
- 第 96 号(2007.11.30)：チェル救、「ステファニー・レナト賞」受賞する。
- 第 97 号(2007.01.31)：「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」実施につき、事前調査。
- 第 99 号(2007.05.31)：ナロジチでナタネの種蒔き開始。

(戸村京子)

## 私の愛する「ポレーシェ」

慈善基金「チェルノブイリの人質たち」代表  
ヴラディーミル・キリチャンスキー

私は、自分の住んでいる地方のことではなく、皆さんの機関誌のことを言っているのです。

遠く離れた、しかし私たちポレーシェの住民みんなにとって親しみ深い国で、出版物の題名にこの地方の名前が用いられるというのは、本当にめずらしいことです。

ポレーシェという言葉は、歌のような響きを持っています。ずいぶん昔、1979年のことですが、その頃若者向けの新聞の記者だった私は、若者たちが団体でハンガリーを親善訪問するのに同行しました。16両の列車が、まるごとウクライナの若者たちでいっぱいでした。ハンガリーで、自分たちの住む地方についての歌のコンクールがありました。その時、私はポレーシェについての歌の歌詞を書きました。

しかしその後、私は、チェルノブイリ原発で事故が起こり（ソ連では、すべてがこの上なく安全だと言われていたのです）、被災者の救援のために基金を設立して、18年もその代表を務めることになろうとは思ってもみませんでした（8月17日で、私たちの基金が設立されてから18年になります）。

ですから、日本で『ポレーシェ』という機関誌が発行されるようになった時には、あたかも喉の渇きをいやしてくれる水を、一口

飲んだような気分でした。

大変残念なことですが、我が国では、人道支援の事業は評価されていません。何かの折には、美辞麗句を並べて、賞賛してもらえることもあります。一般的には、慈善基金の活動にはみな関わりたがらないのです。従って、この18年は、ただ支援活動だけでなく、官僚たちや権力との不断の闘いの年月でした。私たちは、何の見返りも求めることなく、ただ支援を望んでいるだけなのに…。

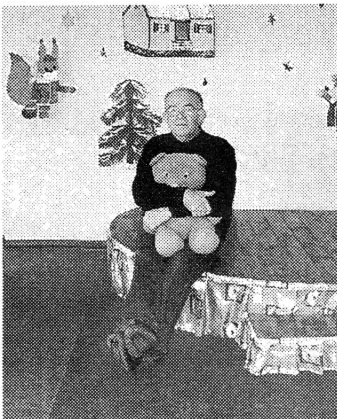
そしてしばしば、すべてを放り出して、国民の大多数がそうしているように、ただ自分のためだけに生きようという気になることがあります。しかし…そんな時にはすぐに、ナロジチの住民のこと、遠い日本に、私たちの問題を身近に感じ、その解決に力を貸してくれる人たちがいることが思い出されます。そしてまた事務所に行き、仕事をし、人々の支援を続けるのです。

日本で『ポレーシェ』が出ているのはうれしいことですが、私たちに日本語がわからないのは残念です。とはいえ、『ポレーシェ』の最新号を手にとると、誇張ではなく、世界で起こっていることがすべてわかるような気になり、生きていこうという気力が新たに湧いてきます。

『ポレーシェ』100号の発行に際して、編集の皆さん、そしてすべての読者の皆さんにお祝いの言葉を申し上げます。そのついでに自分自身にも、おめでとうと言います。私は、この機関誌の愛読者なのですから。

この機関誌の発行は、皆さんが私たちのことを思い続けてくれていることの証です。いつまでも『ポレーシェ』の発行が続きますように！

（翻訳：竹内高明）





尊敬する「チェルノブイリ救援・中部」の皆さん！

この記事を読まれる日本の方に、『ナロジチの我々は、ただ手をこまねいて支援が来るのを待っているのだ』とは、考えないでいただきたいと思います。とはいえ、残念ながら、チェルノブイリ事故の後 21 年経った今も、すべての問題が解決されているわけではありません。

私たちはここに住み続け、自分たちの力の及ぶ範囲で、問題を解決しようとしています。私たちの地区では、地区復興のためのプログラムが作成されています。農地を肥沃にし、復興させるというだけでなく、その他の産業の問題や社会問題、人間の社会に共通のいろいろな局面が取り上げられています。このプログラムの実現には、もちろん多額の資金が必要ですが、私たちはその資金が、地区に提供されるように働きかけています。

プログラムには、ナタネ栽培に関する記述もあります。この課題について、日本の方々から協力するという決定をしてくださいました。これまでも常時行っている支援と同様、このご決定にも感謝申し上げます。実験的な栽培に続いて、広い面積でのナタネ栽培が計画されています。ナタネ油をバイオ燃料に加工するには、「工場」あるいは少なくとも「装置」が必要になります。このような明るい将来の見通しを与えてくれる皆さんのご支援を、私たちは歓迎します。

しかし、ここで指摘しておきたいのは、すべてはそれほど簡単にはいかないということです。

バイオ燃料製造に関連する法律が、我が国ではまだ整備されていません。装置の設置に関する許可を得、さらには工場の営業許可を得たりするためには、イバラの道を歩んでいかなければなりません。そのほかにも、ナロジチ町が属している第 2 ゾーン[強制移住区域]では、大規模な建設工事は、法により禁じられています。この障害も乗り越えなければなりません。

私たちは、現段階での第一の課題は、ナタネの栽培と播種面積の拡大だと考えます。バイオ燃料の工業的規模の生産は、今のところ、将来の展望に含まれる課題です。

ここで改めて強調しておきたいのは、皆さんの支援が行われているという事実、それ自体が、私たちにとって非常に大きな意義を持っているということです。それは現実的にも、また心の励ましとなるという意味でも、きわめて貴重なものです。

最後に、この場をお借りして、「チェルノブイリ救援・中部」の皆さんに、私たちにも大変なじみ深い名前の機関誌『ポレーシェ』100 号の発行のお祝いを申し上げます。

アレクサンドル・プロコペンコ  
ナロジチ地区議会副議長



〈(左) ナロジチ町長と(右)プロコペンコ氏〉

## 竹内さんのウクライナ便り

『ポレーシェ』の編集子から、「本誌 100 号の発行にあたり、ウクライナ駐在員としての 12 年余を振り返って一文を書くように」との依頼がありました。で、振り返ってみますと…ソ連崩壊後 3 年も経たないキエフに、ウクライナ語はおろかロシア語もろくにわからない状態で来たその日から、思えば本当に多くの方々に助けられました。その中には、チェルノブイリ被災者の人たちからのサポートも多く、私は、救援団体の駐在員という身分ではありながら、自分自身が救援活動に携わっているという気持ちはあまりなく、むしろ救援活動の手伝いをしながら、ある意味で、自分自身が支援されているという感じでした。一方では、日本にいればおそらく会う機会もなかっただろう、さまざまな職種の日本人の方々とも、お近づきになることができました。新聞記者、商社員、俳優、音楽家、サーカス芸人、ロシア語通訳、日本語教育専門家、銀行員など。また、やはりウクライナで活動している、日本の他のチェルノブイリ救援団体の方々とも知り合い、それぞれの救援活動に対する考え方を、伺うこともできました。

この間、ウクライナはいろいろな面で大きく変化し、素人の私が、かつてキエフ言語大学で日本語講師の仕事をした頃と比べると、今では、日本の諸機関から日本語教育の専門家が派遣されており、キエフ工業大学の図書館内に開設されたウクライナ日本センターでは、初級から上級までの日本語コースがあり、日本に関する各種資料の閲覧・貸し出しが行われています。何度も日本を訪れている私の友人 Y 君は、キエフの情報誌に、大阪や奈良の訪問記を寄稿しており、彼によると、近く発行される「金持ち向けの旅行情報誌」の第 1 号は、日本特集だそうです。ウクライナと諸外国との交流は徐々に拡大し、それに伴って流入する情報の量も多くなりました。しかしそれは、外資の参入というだ

けでなく、ウクライナから他国への出稼ぎも、交流の一面です。ごく最近、内相・大統領・首相の 3 人が、それぞれ国外の医療機関で検査・治療を受けましたが(それぞれ心臓病・ダイオキシン中毒・膝の故障の関係)、これは彼らが自国の医療を信頼していないことの表れでしょう。一方で、月額 100 ドルにも満たない年金をもらっているチェルノブイリ被災者でも、がんの手術や治療を受けるにあたり、1,000~2,000 ドルを払わなければならないという現実が、今も存在しています。

私がウクライナから見ている日本や世界も、やはり大きく変わりつつあります。日本では、「異なった考え方・感じ方」に対する寛容さ、あるいはそれと真剣に対峙することで自らを見直し、自らを豊かにする、という態度が薄れてきているように感じるのですが、いかがでしょうか。それは、他国との関係についてだけでなく、自国の過去についても言えるような気がします。自分に都合のよい、自分を満足させてくれる過去を、自分の味方にして利用するのでなく、日本の過去にも多様な考え方・生き方があり、実現されなかったいろいろな可能性があった、ということに対する想像力が、日本と世界の未来を豊かにしてくれるのではないのでしょうか。私は、ウクライナと日本の方々に支えられて、自分のささやかな役割を果たしている人間にすぎませんが、そのように開かれた豊かな未来のために、ともに力を出し合っていくお手伝いができれば幸いなことと思っています。(7月19日)



# 《ポレーシェ発刊 100号に寄せて》

91年の夏、ソ連（当時）の古都キエフにいた。例の赤い旗ではなく、黄色と青の旗が目立った。何故かなあ…?と、思いつつ苦勞して帰国したのだが、その後、新生ウクライナの旗となった。

今、ナロジチをその色で染めようと夢見ている。不思議な因縁だと思う。（小牧）

99年のスタ・ツア帰国後、すぐに取り掛かった53号から編集に加わり、はや8年。当時はパソコン操作も覚束なく、新人編集委員は半泣きでした。今は編集長を泣かせています。ポレーシェの歴史の半分に関わった重みはひしひしと…。（市原）

「こころと体の健康」を思い、断食に挑戦！

「休脳日」「情報断食」などをも兼ねて。その結果として、「あるがままに」生きる事に、一歩でも近づければ！ポレーシェ100号に乾杯！

（綾部）

ポレーシェ100号おめでとう。

そしてよくぞここまで続けてこられた事よ！色々なことを思い出します。チェルノブイリの原発事故が起きた時は、何も情報がなく、ただ放射能で汚染された食品ばかりに気を遣い、「子ども達を守りたい」の親心で、勉強会を始めたのがきっかけでした。それからどうしてか抜けられなくて、今は孫がかわいい年になってしまいました。さてこれから何年みなさんについていけることか…。（大谷）

祝 100号発刊！ 編集陣の努力に感謝したい。現地もチェル救も随分変わった。変わらないのは何年経っても消えない「放射能汚染と貧困」だ。今、「汚染された土壌の浄化とバイオエネルギーの製造」の取り組みが始まった、バイオガスを担当する僕もこの半年が正念場である、編集はできないけどガスは作ります。（原）

エンジンを持たないチェル救号は、未だオールを手に目標遠く進行中。幾多の風雨をものともせず信念を果たそうとする、貴方たちに脱帽。これからも、曳航をお願いします。（恭子）

## ＜「ポレーシェ」編集部より＞

2ヶ月に1号、1年に6号…。気の遠くなるような積み重ねと、16年余の歳月が、100号達成へと導いた。今、1号1号を読み返してみても、その時々運営委員と支援者たちの「喜怒哀楽」が、ギッシリと詰まっている。「チェルノブイリの被災者を救いたい」という想いと、「日本で、そして世界で、同じあやまちを繰り返してはいけない」という願い。しかしながら、そのどちらに対しても、達成感と焦燥感が相半ばしている。

今また、地震列島日本に、「あわやチェルノブイリの再現か!?!」という激震が走った。「ポレーシェ」は、これからも150号、200号と続いていくのかもしれない。また、それを望むところではあるが、「哀」から「怒」へ、そして「喜」から「楽」へと、その流れが決して手順前後することなく、正しく流れていくことを祈りながら、いつも「怒」を忘れずに、発信していきたいと思う。読者の皆様に、深く感謝している。（神野英樹）

## 事務局便り

雨にぬれるあじさいの季節から、いよいよ夏本番の季節になって、事務局では蚊取り線香の出番も、もうそろそろです。そんな夏に向けて、時代物の冷蔵庫が壊れてしまい、その前には、コピー機と掃除機、そしてさらにはFAX機…と、次々と故障が続きました。チェル救の歴史をともに歩んできた、これらの機器達？「ごころさま」。まさしく今年は、「亥年現象」なのでしょうか。

6月23日、一年間の総決算である「総会」も、みなさまのあたたかいご支援のもとに無事終えました。7月に入って、『ボランティア貯金の助成金交付の決定』を受け、「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」も益々、拍車をかけ、大きな成果につながるよう進行中です。

一方で、これまでの広報活動や、講演会などで多くの方々の理解を得て、その反響は色んな形で寄せられて来ています。貴重なご寄付、あたたかいメッセージ、ありがとうございました。

先日は、テレビメディアの取材で、記者の方が事務局を来訪されました。また、若い学生さん達からも電話でのお問い合わせで、「取材訪問したい」「菜の花プロジェクト関連の資料を送って欲しい」等々、嬉しい対応に追われているところです。気持ちをひきしめて、自分自身ができるところで頑張らなければ…と思う今日この頃です。(綾部)

現地から送られた菜の花開花の写真を見て、菜の花プロが本格的に始まったと実感したが、先日、緑美しい伊那に赴き、バイオディーゼルプラントの組み立て工場となる「旧牛舎」を見て、ますますその感を強くした。古く、所々朽ち閑散としたその建物は、かつてナロジチ病院の給湯給水設備工事を請負い、「ナロジチ名誉市民」！になった原富男さんが選んだだけあって、妙にナロジチ的雰囲気を感じさせていた。冬の凍てつく寒さの中で組み立てられ、やがてナロジチの『配合飼料工場』に設置される様が浮かび、ちょっと胸が熱くなる。そのプラントの設計業務請負契約も結び、多くの支援して下さる方々のご寄附が、着実に形になっていく。理不尽な原発事故によって未曾有の被害を受けた人々に、「希望」という思いが、だんだん形になっていく。ところで、話は暗転する。

事務局に1本の電話が入った。「…千葉に住んでるんですが、放射能測定器の数値が、昨日通常の4倍を示したんです。柏崎刈羽原発の放射能漏れがあったんで心配なんです…。」——活断層の真上に建つ「想定外」の原発のせいで、「想定したくない」ストーリーが起きるのは、時間の問題なのか？(山盛)

## 編集後記

- ☆奮発して通販生活でBOSEのミニコンポを買った。安物のラジカセとは音が全然違う。これで秋のチャリティコンサートに向け、一気に音楽モードに突入！皆さんも是非来てください。(佳)
- ☆この2ヶ月間で、「悪寒戦慄」を2度体験した。体温は40.3℃を記録！気疲れと疲労で免疫力が低下し、常在菌が元気になったのだとのこと。嫌いな注射も、今回はありがたかったあ。(美)
- ☆ポーシェ100号分を振り返っていたら、夜が明けた。その産みの親としては、子どもが育ち、孫、いや曾孫が育ったことになる、一気に老けたウラシマのように…実際の孫も3人だが。(京)
- ☆バックナンバーを振り返るたび、思わず記事に目がとまる。編集子の中で、ついつい思い出話に花が咲く。案の定、100号の編集は久々の「午前様」となった。心地よい疲労感に乾杯！(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14  
印刷「エープリント」  
TEL・FAX (052) 871-9473